
新聞部員に恋をした。

頼白井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新聞部員に恋をした。

【Nコード】

N3736B

【作者名】

頬白井

【あらすじ】

私が好きな人は、新聞部員。でも、クラスも違うし接点なし……。そんな中、学校のイヴェントで持久走大会が！優勝すれば、新聞部からインタヴューがあるみたい。これをキッカケに、彼に急接近！そんな片想い少女の奮闘記。

（前書き）

この作品はフィクションであり、人名、団体、持久走大会は架空のものです。

私は桜井龍人さくらいりゅうじんが好きだ。

と、心の中や、部屋で一人の時には何度も口にしているけど、本人の前では言ったことがない。

彼と私はクラスが違うけど、同じ高校二年生。成績が良いのは有名だけど、それよりも“新聞部の部長”って言われる事が多い。そんな、ただでさえ知的な彼が、メガネをかけてるなんて反則。池袋乙女ロードにいたら、確実に写真を撮られてるだろう。

「アキ？　おい」

私を呼ぶ声がした。しかもすごい近く。

そうだ。今は昼のお弁当タイム。

目の前のツクシ……春日ツクシ（かすが　つくし）が私を呼んだんだ。

「どしたの？　なんかニヤニヤしちゃって。『あったかい目……のつもり』だったの？」

ワケの解らない妙な例えをする、秋葉原にいたら確実に写真を撮られてるような童顔ミニマム少女は、私の友達だ。

「何それ？」

「猫型ロボットに出てくるよ」

「知らないよ、そんなの」

「国民的アニメなんだけどな……」

まあ、そのアニメは知ってるし、子供のころ見てたけど……マニアックなやつは覚えてて“お金を入れると誰でも転ばすアイテム”くらいだ。

「国民的アニメでも、知らないのは知らないの」

「……それもそうよね……どうも、リユートに慣れてると、どこまでが一般的なのか解なくなっちゃうのよ」

ツクシは、桜井くんを“リユート”と呼ぶ。呼び捨てなんて、私

にはとてもとても……うらやましい。

「桜井くん、物知りだもんね」

私が桜井くんに片想いしてるのは、ツクシには黙ってる。だって、本人は否定してるけど、ツクシも彼のことが絶対好きなハズ。良き友にしてライバルだ、彼女は。

「んー物知りって言えばカッコいいけど……」すぐ社会的で社交的な気難しいオタク」って感じかなあ」

桜井くんを悪く言って、桜井くんを独占しようって作戦は……通じないわよ。

でも事実上、ツクシは桜井くんを独占してるようなものだ。

桜井くんが部長をしてる新聞部には、桜井くん以外にもう一人だけ、部員がいる。

それが彼女、春日ツクシだ。

放課後は毎日のように部室で二人きり。休日にもしょっちゅう会ってるらしい。

それでも“私とリユートは、恋人なんかじゃない”って言い張るツクシは、往生際が悪い。

その後も桜井くんについて、興味ない風に装いながら、ちゃっかりいろんな情報を集めてると、ツクシのケータイが鳴った。着メロは……何だろ。疾走感のある、高音域の曲。あまり、テレビでも聴かない曲だなあ。

「最近ほドレイクネタが気に入ってるらしいよ……って、ウワサしてたらリユートから電話じゃん」

ドレイクがよく解らないけど、それはおいといて。着メロだけで桜井くんからだとか解るということは、今の着メロは桜井くんにか使ってるということだ。良いなあ……ケータイ番号……。

「ほいほーい。どしたの？ 今日インタヴュウ？ へえ、彼、弁論大会優勝したんだ……」誇り」……って「そうそう、それそれ」じゃなくて！ リユートいつも「要件を言え」って言うじゃん。『そーだった』って忘れないでよ。うん。解った。終わったら来るんだ

よね。うん。はい。また後で」
「なんか楽しそうな会話だなあ。」

「ごめんごめん」

「長かったね。何かあったの？ インタヴュウって言ってたけど」

「うん。三年生の人が弁論大会で優勝したから、放課後はインタヴュウに行くって話」

「へえ。ツクシも行くの？」

「私は部室でパソコン仕事」

「忙しいの？」

「んー。いつも通りかな。二人しかいないから、動けるときに動ける人が動かないと、新聞出来ないから」

新聞部が二人でも平気なのは、二人ともがしっかりしてるからなんだろうな。もし、中途半端な三人目が入ったら、逆にうまく行かないと思う。

「大変ね」

「そうでもないよ。好きなことだし」

……好きな人、の間違いでは？

「ってか、アキだって陸上部頑張ってるじゃん」

私は陸上部だ。長距離走をメインして、毎日トレーニングしてる。一応、校内でも速い方だ。それよりも、昨日より速く走れたりできるだけで、やりがいがある。

「うーん。頑張ってるって気はしないけど」

「それと同じ。周りは『頑張ってる』って言っても、本人はそんなに頑張ってる意識はない……って、なんかリユートみたいなこと、リユートっぽく言っちゃった」

と、ツクシがノロケたところでチャイム。これから五時間目だ。

「アキ！ アゴ上がってるよー！」

陸上部顧問の相坂先生の檄も、苦しい私にはやっぱり苦しい。
でも、苦しいのを乗り越えたからこそその達成感は、私には大切な物だ。

それがトレーニングでも、記録会でも同じ。

競うとかより、苦しくても諦めなかったこと自体が、私にとって
は大きい。

……べ……別に、負けたのが悔しいんじゃないんだからねっ！

「今日も勝ち！」

土手道コースの七キロを走り終えると、同じく陸上部の三島茜が
声をかけてきた。
みしま あかね

「じゃあ、明日は私が勝つもんね」

と、こんな具合に、陸上部で仲の良い友達で、ライバルだ。一年
生の時は私の方が速かったけど、二年生になってからはずっと負け
てばっか。しかも、ほんの少しの差で。

まあ、陸上部……多分学校の女子で一番速いから、競り合えるだ
けでも充分。

んで、茜と雑談しながらクールダウン。軽く流す感じでトラック
一周……寒！

冬だもんなあ……走ると暖かいけど、走り終わると寒いよ……コ
ートコート……おお、マネージャの一年生気が利く。

その頃には全員帰ってきてた。まあ、クールダウンはただだけど。
「ん、全員いるね。じゃあ着替えて部室集合。走らないで」

相坂先生の指示にしたがって、移動。この指示は“走らない”の
後の“テキパキ”が省略されてる。みんな解ってるから、言わなく
てもいいんだ。

みんな着替えて部室に集合。ミーティングだ。

「みんな揃ったね？ 私からの連絡は、二週間後の持久走大会のこ
と。今日長距離組が走ったコースがそうなの」

あ、そういえば、去年も走った……。

「女子は良いけど男子！ 去年の屈辱を晴らすために、記録会以上

の調整ね！」

男子部員からブーイング。でも、相坂先生の言うことは解る。たしか、去年は一年生……今は二年生の、帰宅部の人が優勝した。しかも二位の先輩に、二分近くも差をつけて……。

「よりにもよって帰宅部の生徒にトップを譲るなんて言語道断！なりふり構わず優勝取りに行きなさい！」

……ご愁傷様。女子は平気みたい。この前卒業した先輩が優勝してた。その週の校内新聞の一面を飾って、インタヴュウが載ってたのを覚えてる。

……ん？

インタヴュウ？

優勝してインタヴュウ……。

……あ。

私が優勝すれば、桜井くんにインタヴュウしてもらえるじゃん！しかも、今日みたいにツクシ抜き。

ふたりきりじゃないですか！

「アキ、何ニヤニヤしてるの？」

相坂先生の指摘と、部員の笑い声で、私は我に返った。

「去年のバックナンバ？ あるよ」

翌日、私はツクシに頼んで、去年の持久走大会が載ってる新聞を買った。“去年男子がボロ負けしたから、男子の優勝者を陸上部の後輩に見せる”とウソついたけど、気付いてないみたいだ。

……やっぱり。

ちゃんと、優勝した先輩のインタヴュウが載ってる。それも、その日のコメント以外に、別にインタヴュウしたらしい。

あれ？

男子の優勝者インタヴュウがないぞ？

建て前だったけど、気になるところもある。

「男子の優勝者インタヴュウがないみたいだけど？」

「あ、去年マサキくんが勝ったのよね。んー……インタヴュウ記事欲しかった？」

あ、ツクシ、優勝者を名前で呼んでる。

「知り合いなの？」

「うん。リユートの……なんか説明面倒だから『友達』って言うつくね」

……ここで“恋人”だったら、それこそ池袋乙女ロードだ。まさか、ね。

「……はあ。それで、インタヴュウは？」

「詳しい事情は知らないけど……マサキくんのことだから、まともな話にはならなかったんだと思う」

……体力バカと思っておこう。

「……無いならいいよ、ありがと」

「いえいえ。どーいたしまして」

ホント感謝。ちゃんと“インタヴュウ・桜井龍人”と書かれてるし……。

だから、優勝しよう。

ケータイ番号貰えるとか、アド貰えるとかは解らないけど、堂々とふたりきりで会えるチャンスなんだ。

レースのライバルも、恋のライバルも手強いけど……。

頑張るぞ！

なんというか、有言実行って難しい……。

普通に部活だけやっててもムリ……そう思っ、家帰ってからの自主トレを始めたんだけど……。

「アキ、最近タイム落ちぎみだけど、体調悪いの？」

と、今日の部活で、レースのライバルに心配されたり。

「大丈夫よお。ちよっと食べ過ぎちゃって」

なんて、変な言い訳をして、今日は帰ってきた。

うーん。

疲れが溜まるようなトレーニングは、逆効果なのかなあ……。

かといって、茜と同じだけしかトレーニングしなかったら、勝てないと思う。

気長に少しずつタイムを上げてくやり方は確実だけど、なんせ持久走大会まで十日もない。

……おしよう。

「桜井くん……私はくじけそうです」

なんて、ツクシに貰った去年の新聞につぶやく。……新聞イコー

ル桜井くんじゃないけど。

……あ。

ありがとう！

さすが桜井くん！

『陸上部以外で、何か特別な練習をしましたか？』

『家に帰ってから走ったんですけど……それより、お風呂で筋肉ほぐしたり、よく寝たりして、次の日に疲れを残さないよう気を付けてます。基本的なことなんですけど、急に練習量を多くすると、思ったよりも疲れが残っちゃうんです』

もちろん先輩もありがとう。

追い風だ。

ツイてる。

いや……これは……。

桜井くんが、味方してくれてるんだ！

その後、練習方法を改善したけど、あまり効果なし。

それでも、私は続けた。桜井くんが先輩に訊いてくれた練習法、絶対効果あるハズ！

って、少しずつ効果が出てきた。

部活も自主トレも、かなり楽に走れるようになったのだ。

タイムもグングン伸びて、持久走大会の二日前には、ついに茜に勝てた！

「負けた……一年生の終わりに追い抜いて以来初めて……」

悔しそうだった。……茜も、もしかしたら自主トレしてたのかも。

「持久走大会じゃ負けないからね！」

「私も！」

スポ根みたいな会話……私もノリノリだったけど、よく考えたら

……茜に火い付けちゃった？

でも私には桜井くんがついてる。

これ以上に心強い応援はない！

泣いても笑っても、ついに持久走大会当日。

緊張して眠れない……ようなことはなかった。むしろ、ここ最近

寝つきが良い。これも自主トレの成果かも。

グラウンドに集合して、ラジオ体操……なぜか第二までキツチリやってから、スタート。

先に男子がスタートして、十分後に女子がスタート。そうすると、だいたい同じ位に終わるみたい。

男子がスタートラインに集合して……ピストルが鳴った！

……すごい勢いで飛び出した小さな影……チラッとしか見えなかったけど、多分、去年優勝した人だ。

そんなことよりも、桜井くん頑張った！

男子がいなくなると、スタートまでの緊張の時間。

私はウォーミングアップを始めて……って、茜もやってる。

……なんか、茜のオーラが違う。彼女がすごく大きく見える……。いやいや負けらんない。この先ずっと負けてもいいけど、今日だけは負けらんない。

戦いは始まっている。

「女子はスタート位置に集合してください」

スタートラインの一番前。少しでも前。隣に茜がいる。多分、レースの最後まで。

「位置について。ヨーイ……」

スタータ役の校長先生は、お決まりのかけ声にピストルでスタートを宣言した。

先頭集団は十人くらい。もちろん私と茜も含まれてる。

平気だ。周りのペースじゃなくて、普段の私のペース。目の前にも人がいるけど、邪魔じゃない。

この二週間、部活で何度も走った土手道に行く。

車も通る橋何本かと交差するけど、橋の下を通ったりするので、安全。一応コースは考えられてるのね。

私の隣にいた、バスケ部かなんかの子が、少しずつ遅れてきた。

私はいつものペースだからいいけど、人のペースに合わせるのは大変だ。多分、いつもの何倍もキツく感じてるのだろう。それがいつもより速くても、遅くても、だ。

そんな調子で、先頭集団の数は減っていく。私の前を走ってた子もみんなに迷惑かけながらズルズルと後退していった。横に避けるくらいしてよ……。

そんな風に、少しずつ先頭集団を減っていくなか、男子のトップとすれ違った。背は低めで手足は細い。陸上部じゃなくて……去年優勝した彼だ。去年の新聞にレース中の写真が載ってた……どーやって撮ったんだろ。

……陸上部男子も頑張ってたのに……帰宅部でどうすれば勝てるのよ。二位の男子、まだ顔が解らないくらい遠い……。

美しいフォームとか、そんなこと全く関係ないのに速い人はとりあえず無視。

もう少して女子の折り返し地点って辺りで、五人にまで減った先頭集団は、ごぼう抜きを始めた。

誰をつて、男子の最後尾。

……なんというか、その辺の男子は太いか細いかの二択……。

どっちでも、不健康そうな感じ。長距離には向いてないかな。学校の行事じゃなかったら、走ることなんてしない人たちだろう。

……男子の後にスタートした女子に抜かれるって、どう思ってる？

なんて、解らないこととか考えてみる。思ったことは見えないから解らないけど。

無事に折り返しをすると、折り返しの直前に抜いた男子が、女子の折り返し地点で……。

「そこは女子の折り返し地点だ！」

先生ナイスフォロー！

前の人に付いてこうなんて考えてるからだ。それとも、少しでも楽をしたかった……とか。

そんなことより、あと半分。先頭集団は私と茜に、二人ほど。もう一人いるけど、少しずつ遅れてってる。

折り返したので、女子とすれ違つてく。先頭集団の誰かの友達とか、私の友達が声をかけてくれる。陸上部の子は……無口。喋ってペースを乱してまで、応援して欲しくない。

あれ？ ツクシ？

この子、なんでデジカメ持って走ってるの？

……新聞にレース中の写真が載ってた理由が解ったかも。

でも、去年の写真はブレてなかった。カメラにそういう機能があるんだろっけど……すごい……。

「頑張つてねー！」

ツクシはそう応援してくれたけど、そっくりそのまま返してやり

たい。走りのことだけ。

そういえば、桜井くとすれ違ったり、抜いたりしてないのに折り返したなあ。

今は女子と男子の折り返し地点の間にいるのかな。ちょっとでもいいから一緒に走りたかった……いや、一瞬でも一緒になったら、心臓がドキドキしたり、少しでも長く一緒にいたいなんて思ったりして、ペースが乱れちゃうかも。

そう考えれば、桜井くんに会わなかったのは良かったかも。

そうだ。私は彼に、“優勝者”として会った。

レース中に会ったら、私は“女子先頭集団の一人”だ。

それじゃあ、ただのファンみたいじゃん。

インタヴューを受けて、私を“私”と見て欲しいから……。

だから、私は勝ちたい。

そろそろ、いい距離だ。

私はラストスパートをかけた。

私は集団から飛び抜けてったけど、予想通り、茜だけ付いてきた。

先頭は私と茜だけ。

茜は私の隣。このままだと写真判定になる感じだ。

こう競り合っちゃうと、気合入った茜は強い。

だけど負けてらんない。負けらんない。

走った。

負けないと念じながら。

勝つと信じながら。

走って走って、走りつづけて。

気付いたら、隣にいたはずの茜がいない。

私は思わず、振り返った……振り返って……しまった。

茜がいた。

私の、後ろに。

苦しそうな表情だけど、目が合ったら、微笑んでくれた。

「先に行つて。いつか追い抜くから」

そんな風に言つてゐるように見えた。

私は頷いて前を向き……。

そしてそのまま、ゴールテープを切つた。

全校生徒の前で校長先生から賞状を貰い、多くの拍手を受けて初めて、優勝したんだと実感した。

茜は一言。

「おめでとう」

と言つてくれた。彼女がいたから、私は勝てたと思う。第一、スタートからゴールまで、ずっと楽しく走れた。それは茜のおかげだ、絶対。

だから。

「ありがとう」

つて一言だけ。

伝わるかは解らないけど、レースの最後、茜の言葉は私に届いた。だから多分、私の言葉も届いてくれると思う。

それは、もういいとして。

結果は優勝。

つまり……インタビューをしてもらえる！

「優勝おめでとう！ 感想をどうぞ！」

……ツクシですか。

そういえば桜井くん……男子優勝者のインタビューをしてるのが見えた。

「アキ？」

「ああ、ゴメン」

ツクシは……なんか、携帯ラジオみたいな機械をマイク代わりに突きつけてくる。多分、録音できるヤツなんだろう。

「えっと……最初から最後まで楽しく走れました！ 陸上部のみんなありがとう！」

と軽くこなした。

「どもありがと。じゃあ、また後日インタヴュウするから、よろしくね」

「うん。解った」

って、あまり興味なさそうに装ったけど、内心は飛び上がって喜びたいくらい。

神様、努力って報われるんですね！

その後日。

休み時間に、ツクシから“今日の放課後平気？”と訊かれた。

「平気だよ」

危つく“もちろん！”と即答してしまいそうになったけど。

指定された場所は和室。普段は茶道部が使ってるけど、普段茶道部は活動してない。

カギが開いてたので、入ってみた。まだ桜井くんは来てないみたい。

さて、いざつてときに困らないよう、インタヴュウのあとのこと考えないと。

思い切って告白？

いやいや、そんな大それたことムリ。

まずはケータイ番号とかアドとか。

そうだね。それが一番だ。

じゃあ何て言って貰おう。“陸上部の大会情報とか、連絡したいんですけど”なんて良いかも。

でも、よくツクシが訊いてきたなあ。

あ、いいのか。ツクシが訊かないとダメだから、私から連絡できるのは便利なんだよね。

そんなこと考えてるうちに、ノックと、和室の引き戸が開く音がした。

来たよ来ちゃったよ桜井くん。
どうしょ。

「あれ？ アキ早いね」

……ツクシ？

どおして？

なんで？

「ツクシ？ さ……桜井くんじゃないの？」
つつい訊いてしまった。

「ん、部室で作業中だけど、それがどうしたの？」

「あ……その……インタビューって桜井くんの係だと思ってたから……」

なかなか頑張った言い訳。気づいてない……よね？

「相手によって、インタヴュアは変えてるよ。今回は『優勝者がツクシの友人なら、ツクシの方が、相手も話しやすいだろ』って、リユートが言ってたよ」

……そうだね。普通に考えればそうだよね。
納得は出来るけど……。

この脱力感。

相手がツクシの方が、いいインタヴュウにならないのでは？

そんなこと、口が裂けても言えないけど。

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

まず、このオチでカテゴリが“コメディ”じゃない理由は……察してください……。

“恋愛”を期待してた方には申し訳ないですが、オチのためです。ご容赦していただきたいと思います。

それにしても一人称小説はやっぱり苦手ですね。

勘違いという名のウソが使えるメリットもありますが……やはり苦手です。

特に主人公の性別が私と違って、歳も離れてるとキツイ。書いてから「こんな考え方しないだろ」と推敲。

まあ、思い付きプロットでさっくり書いた作品です。

サクッと、軽く読んでくださいね。

……ここ、あとがきでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3736b/>

新聞部員に恋をした。

2010年10月8日15時12分発行